

## 第 80 回 有楽町の菊田一夫像と湯島の岩崎弥太郎像

筆者：林 久治（記載：2019年2月15日）

### （1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気俣な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は [日本銅像探偵団](#)（1）のサイトの銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではなく一般には全く知られていない人物」という意味である。最近、私は大阪近傍で、その候補となりそうな銅像を数体ネットで見つけている。

私は主として近畿地方や東京で銅像探索を行っている。昨年末の記事は、以下の通りである。近畿地方：[70回の記事/f](#)、[71回の記事/f](#)、[72回の記事/f](#)、[73回の記事/f](#)。東京：[74回の記事/f](#)。私の銅像探索の目的は、日本文化と日本人の人生を実地に学ぶことと、運動不足の解消である。

本年の1月11日は久しぶりに好天であったので、私は都心へ銅像探索に出かけた。[75回の記事/f](#)では東京・講道館の正力像の探索記を、[76回の記事/f](#)では上野・寛永寺の了翁像の探索記を、および[77回の記事/f](#)では了翁僧都道行碑記の解説を記載した。[75回の記事/f](#)で、私は次のように記載した。「私の調査では、正力松太郎氏の銅像は日本に6カ所7体あるが、[日本銅像探偵団](#)サイトの「日本の銅像ギャラリー」欄に収録されているのは、その内わずかに1体に過ぎない。」

岩手県奥州市の後藤伯記念公民館にも、なぜか正力松太郎と後藤新平の銅像が並んで置かれている。幸いなことに、私の中学・高校の同窓生の一人である佐藤弘一君が長らく水沢（旧・水沢市、現・奥州市水沢地区）に住んでいる。そこで、私は佐藤君に「後藤伯記念公民館の正力像と後藤像、旧緯度研究所の木村栄像、および奥州市横町の佐々木佐五平像の撮影」を依頼した。これらの銅像は[日本銅像探偵団](#)サイトの「日本の銅像ギャラリー」欄に収録されていない。早速、佐藤君からこれらの写真が送られて来たので、[78回の記事/f](#)では、奥州市の正力像と後藤像を紹介した。[79回の記事/f](#)では、木村栄像と佐々木佐五平像を紹介した。

[78回の記事/f](#)でも書いたように、水沢は偉人の町で、東北の小都市にもかかわらず、高野長英、後藤新平、斎藤實などの有名人を多数輩出している。従って、狭い市内にはこれらの人々の記念館や博物館が乱立している。ウィキペディアによれば、奥州市（旧・水沢市を含む）には次のような記念館がある。①高野長英記念館、②後藤伯記念公民館（日本初の公民館）、③後藤新平記念館、④斎藤実記念館、⑤木村栄記念館、⑥菊田一夫記念館。

この中で、菊田一夫記念館が異色である。本稿では、「なぜ奥州市に菊田一夫記念館があるか？」との疑問に答える。また、菊田一夫の銅像は、菊田一夫記念館ではなく、東京の有楽町にあった芸術座にかつて設置されていた。今回は、菊田像を

有楽町で探索した記事を中心として、その他の銅像探索記も記載する。なお、本稿においては、資料の記述を緑文字で、私（林）の意見や説明を青文字で記載する。

## （2）愛宕山の散策

私は健康増進のため、毎日のように水泳をしている。しかし、水泳ばかりでは退屈するので、たまには銅像探査を兼ねて東京や大阪で散策を行っている。そういう事情で、2月13日に都心に散策に行った。後藤新平の銅像は、東京港区愛宕のNHK放送博物館内にもある。当館には、岩原謙三（1863-1936：NHK初代会長）や北村政治郎（1882-1933：1925年に東京放送局技師長）の銅像もある。[日本銅像探偵団](#)サイトには、これらの3像は収録されている。しかし、私は「和田精之（1893-1970：ラジオ放送の効果音担当）の銅像も当館にある」との記事（[2）のサイト/1](#)）を見た。本像は本サイトには収録されていないので、2月13日には愛宕山に行き、和田像を撮影することを試みた。

図1に、愛宕山へのアクセス地図（[3）のサイト/1](#)より）を示す。私は今回、地下鉄神谷町駅から愛宕山に登った。「桜田通り」を北に行くと（図1の赤線）、右手に「愛宕山トンネル」が見える。トンネルの入口には、愛宕山に登る階段があるので、私はこの階段を利用した。図1に示すように、トンネルの反対側には、愛宕山に登るエレベーターがある。現在、愛宕山上には愛宕神社とNHK放送博物館がある。なお、愛宕山の紹介は、[4）のサイト/](#)が優れている。

（本文は、4ページに続く。）



図1. 愛宕山へのアクセス地図 本図は、[3）のサイト/1](#)より借用。



図2. 上：愛宕神社  
中：愛宕神社の階段  
下：愛宕山の案内文

参道にある86段の石段は、講談の『寛永三馬術』で有名な曲垣平九郎（まがき へいくろう）の故事にちなみ、「出世の石段」と呼ばれています。

三代将軍・家光公が増上寺に参詣の折、愛宕神社の前を通りかかった時のこと。愛宕山より漂ってくる梅の馥郁たる香りに気づいた家光公は、馬で梅を手折ってくるように供に命じました。急勾配の石段にほとんどの者が怖じ気づくなか、丸亀藩の家臣・曲垣平九郎が騎馬にて石段を登り、手折った梅の枝を献上したのです。家光公は、平九郎を日本一の馬術名人とたたえたといいます。

斜度が40度もある石段を馬で登るのは不可能に思えますが、明治以降3人が達成した記録が残っているそうです。

## 愛宕山

あいがたやま  
みことうち  
 愛宕山は洪積層の丘陵地で、標高は二六メートルである。山頂に愛宕神社がまつられ、江戸時代から信仰と見晴らしの名所としてにぎわった所である。  
 愛宕神社の祭神は火の神（火産靈命）が中心で、江戸時代には幕府の保護もあり、多くの人々から火伏せの神として信仰されてきた。  
 今日のように周囲に高層ビルが立つまでは、山頂からの眺望がすばらしく、東京湾や房総半島までも望むことができた。  
 また、愛宕山には、男坂・女坂・新坂などの坂道があり、男坂は神社正面の八六段の急勾配の石段で、寛永年間（一六二四—一六四四）に曲垣平九郎がこの石段を馬で上下したと伝えられる。  
 昭和五十年十二月（平成二十五年十一月建替）  
 港区教育委員会  
 文化財を大切にしましょう

さて、私はNHK放送博物館に入場して（入場無料）銅像を探索した。しかし、館内には銅像は1体も無かった。そこで、私は案内嬢に「銅像が無いのはどうしてですか？」と聞いてみた。彼女が「銅像は全て倉庫にしまっています」と答えたので、私はがっかりした。

また、私は[5\) のサイト/2](#)より、JR 田町駅前の森永製菓本社に、初代社長森永太一郎氏(1865-1937)と二代社長松崎半三郎氏(1874-1961)の銅像があることを知った。そこで、私は地下鉄御成門駅から三田駅に行って、森永製菓本社ビルのロビーでこれらの銅像を探した。しかし、銅像は無かった。そこで、私は案内嬢に「銅像が無いのはどうしてですか？」と聞いてみた。彼女が「銅像はしまっています」と答えたので、私は再度がっかりした。



図3. 森永製菓本社の銅像（向かって右は初代社長森永太一郎氏、向かって左は二代社長松崎半三郎氏） 本図は、[5\) のサイト/2](#)より借用。

### (3) 有楽町の菊田一夫像

ウィキペディアには菊田一夫の生涯が次のように書かれている。

菊田 一夫（きくた かずお、1908. 3. 1-1973. 4.）は、日本の劇作家・作詞家。本名は菊田 数男。神奈川県横浜市生まれ。生まれてすぐ養子に出され、生後4ヵ月で両親（西郷姓）に連れられて台湾に渡ったが、まもなく捨てられ、転々と他人の手で養育された末、

5歳のとき菊田家の養子になった。台湾城北小学校に入学したが、学業半ばで薬種問屋に売られ、年季奉公をつとめた。その後大阪・神戸で小僧をして夜学に学ぶ。

1925年に上京。印刷工として働くかたわら、萩原朔太郎やサトウハチロー、林芙美子、小野十三郎らと出会い、サトウの世話で浅草国際劇場の文芸部に入る。そののち、1933年に古川ロッパらにより、浅草常盤座で旗揚げされた劇団「笑の王国」に座付き作家として迎え入れられ、劇作の道に入った。1935年ロッパが退団して東宝に所属。翌1936年に菊田も東宝に移籍して東宝文芸部の主力となり、戦時中は岩手県江刺市（現・奥州市）に疎開した。

戦後間もなく、作曲家の古関裕而とコンビを組み、数々のラジオドラマ、テレビドラマ、映画、演劇、ミュージカルを手がけ、多くのヒット作品を世に送り出した。特にミュージカルにおいては、戦後の日本ミュージカルの草分けと言われている。2人の代表作は、ラジオドラマ・映画では「鐘の鳴る丘」、「君の名は」シリーズ、「あの橋の畔で」シリーズなど。舞台では「敦煌」、「暖簾」、「がしんたれ」、「放浪記」、「風と共に去りぬ」など。楽曲では「イヨマンテの夜」、「雨のオランダ坂」、「フランチェスカの鐘」など、多岐にわたる。

1955年、東宝の取締役役に就任する。1957年には芸術座を開館。東宝演劇部の総帥としての仕事のかたわら、映画や帝劇・宝塚歌劇などの舞台の原作・脚本・演出をはじめ、小説の執筆にも精力的な活躍を続け、数々の名作を世に送り出した。ミュージカル「マイ・フェア・レディ」の上演権を獲得し、日本で初めてブロードウェイ・ミュージカルを舞台に乗せた。以後、日本のミュージカルの世界は大きく羽ばたくことになる。また、「がめつい奴」「がしんたれ」「暖簾」「花のれん」「井池」「道頓堀」など、大阪を舞台にした作品により「大阪ものは菊田一夫」と賞賛された。

菊田一夫がコンビを組んだ古関裕而の銅像は、故郷の福島駅にピアノを弾いている豪華な全身像がある。また、福島市の古関裕而記念館には、古関の胸像がある。これら2体の銅像は、[日本銅像探偵団](#)サイトに収録されている。

一方、「菊田一夫の銅像」で検索すると、芸術座に質素な胸像が1体あるのみで、彼が疎開していた奥州市にある「菊田一夫記念館」にも、ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の関連施設にも、ラジオドラマ「君の名は」で有名な数寄屋橋にも、彼が多くの台本を書いた浅草、宝塚、大阪などにも、菊田一夫の銅像は無い。また、芸術座の菊田像は[日本銅像探偵団](#)サイトに収録されていない。

なお、[6\)のサイト/1](#)は、菊田が江刺（現・奥州市）に疎開した経緯を次のように書いている。

菊田一夫が家族を江刺に疎開させたのは、岩谷堂（[江刺市の中心街](#)）出身の森田康一の世話による。森田は軍人だったが、除隊して菊田一夫の書生になり、劇団にも所属していた。疎開していたのは、妻の高杉妙子（女優）とよちよち歩きの女の子、そして妻の両親の4人。本町にある及政旅館の離れを借りて生活していた。菊田一夫は、ときおり東京から江刺に来ては、着物に袴姿で散歩をしていたという。連続放送劇「鐘の鳴る丘」は、1947年7月から3年半にわたってNHKラジオから放送され、古関裕而作曲の主題歌「とんがり帽子」とともに大流行した。1948年には、松竹によって映画化され、全部で3本作られている。主人公である浮浪児たちの喜びや悲しみに、敗戦間もない日本中が涙し、国民の心に明日への大きな希望を育てた。「鐘の鳴る丘」の舞台となった孤児院は、戦中、岩谷堂に家族を疎開させていた菊田一夫が、疎開先の旅館から見た江刺市南町（奥州市江刺区南町）の岩谷堂町役場（現・明治記念館）の建物をモチーフにしたと言われている。

ウィキペディア「芸術座」には、次のように書かれている。

芸術座（げいじゅつざ）は、東京都千代田区有楽町にあった東宝直営の演劇専用劇場。東宝本社ビル内4階（1階は日比谷映画、地下1階はみゆき座）にあった。客席数は約750と中規模であり、客席と舞台が近いのが特長だった。

1957年4月25日 - 開館。こけら落としの演目は森繁久弥主演の「暖簾」。

1961年10月20日 - 森光子主演の「放浪記」初公演。

1973年4月4日 - 芸術座の生みの親であった菊田一夫が死去（享年66）。

1990年9月23日 - 「放浪記」が通算上演回数1,000回を突破。

2005年3月4日～3月27日 - 森光子主演の「放浪記」を最終公演として閉館。

2007年11月7日 - 同館跡地に新劇場『シアタークリエ』がオープンした。

「追悼・森光子さん」と題する記事（[7\)のサイト/1](#)）には、芸術座ロビーにある菊田一夫の像の前で思い出を語る森光子さん（1920-2012）の写真があり（図4）、森は「先生にはこんなに近寄れなかったし、怖くて笑顔も見せられなかった」と言っていた（2002年9月24日）。



図4. 芸術座ロビーにある菊田一夫の像の前で思い出を語る森光子さん  
本図は、[7\)のサイト/1](#)より借用。

[8\)のサイト/9](#)には、「仲間由紀恵、森光子の心を受け継いで…新しい『放浪記』の幕開け」と題する記事が書かれている。その中に、次ページの図5に示すよ

うな写真が掲載されている。仲間由紀恵が林芙美子を演じる新しい「放浪記」が、下記の日程で、異例の105回という大ロングラン公演となったそうである。

2015年10月14日(水)～11月10日(火) 東京・シアタークリエ

2015年11月21日(土)～12月9日(水) 大阪・新歌舞伎座

2015年12月18日(金)～25日(金) 愛知・名古屋 中日劇場

2016年1月7日(木)～31日(日) 福岡・博多座



図5. 菊田一夫の像と仲間由紀恵さん 本図は、[8\) のサイト/9](#)より借用。

図5を見ると、シアタークリエにも。菊田像はありそうである。更に、私は[9\) のサイト/r](#)で、「シアタークリエ1階には旧芸術座より受け継いだ、山下快吉製作の菊田一夫の銅像があります。」との記事を発見した。そこで、私は「現在でも、シアタークリエ1階に菊田像が置かれているのではないか」と思い、今回、有楽町に行った次第である（場所は図6参照）。（本文は、9ページに続く。）



図6. シアタークリエ周辺の地図 本図は、[10\) のサイト/1](#)より借用。



図7. 上：シアタークリエの1階入口、下：菊田一夫君像



図7上に示すように、私がシアタークリエに行った時（午後1時頃）には、1階入口は閉まっていた。しかし、ガラス戸越しに、1階ロビーにある胸像が見えた。私は「しめた！」と思い、入口の窓口嬢に聞いた。

私「あそこにある菊田先生の銅像の写真を撮らせて下さい。」

窓口嬢「だめです。」

私「貴重な銅像なので、何とか撮影させて下さい。」

私が引き下がらなかったので、窓口嬢は上司の女性に相談してくれた。

上司「銅像だけです。他に行かないで下さい。」

上司は入口のドアを開けてくれた。私は窓口嬢に断られた理由を聞かなかったが、後から図7上の写真を見ると、入口には「恐れ入りますが、開場の時間までお待ちくださいませ」と書いてあった。図8に、菊田一夫の胸像と、胸像台に貼られた銘文を示す。

また、次ページの図9には、胸像台の右面に貼られた北條秀司（1902-1996）の銘文（上）と、胸像の脇に貼られたプレート（下）を示す。なお、胸像制作者の山下快吉の経歴は不明である。



図8. 左：菊田一夫の胸像、中：胸像台正面の題字、右：胸像台右面の銘文。

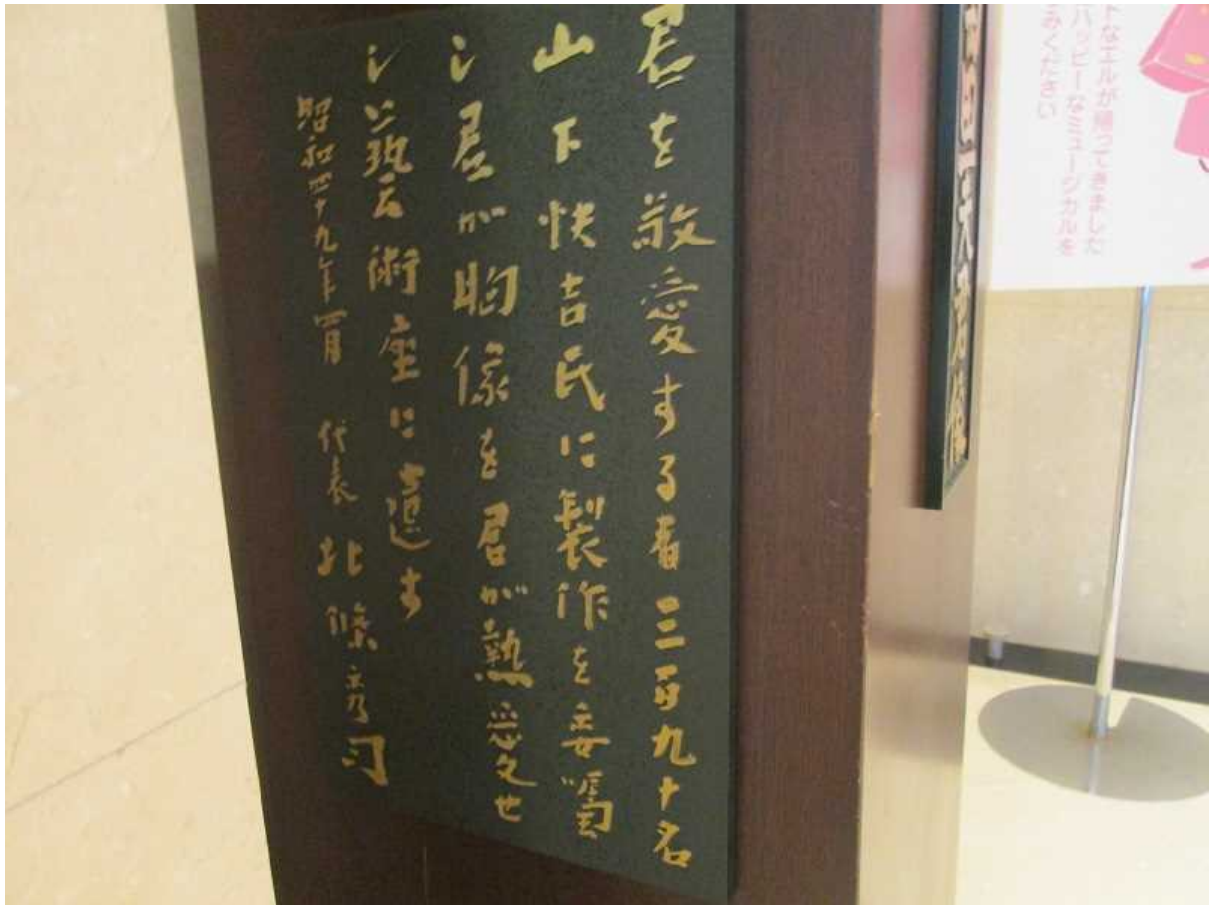


図9. 上：胸像台の右面に貼られた北條秀司の銘文、下：胸像の脇に貼られたプレート。

#### (4) 湯島の岩崎弥太郎像

私は[11\) のサイト/1](#)で、岩崎弥太郎像が東京都文京区湯島四丁目 10-14 の「三菱史料館」にあることを知った。本像は[日本銅像探偵団](#)サイトに収録されていないので、私は菊田像を撮影した後、三菱史料館に行った。その周辺図を次ページの図10に示す。なお、本館の紹介は[12\) のサイト/m](#)が優れている。

三菱史料館に行く道順は大変分かり難かった。春日通りに面して「すき焼きの老舗・江知勝」があり、その向かいの小路を北に行けば（図10の赤線）当館（図10の+）に着くことができる。



図10. 上：三菱史料館の周辺図 本図は、[12](#)のサイト/より借用。（+）三菱史料館、①：創業明治4年の老舗「江知勝」。下：三菱経済研究所。

図 10 上の (+) の場所には、公益財団法人三菱経済研究所の立派な建物（図 10 下）があり、その 1 階には三菱史料館があった。当館は入場無料で、展示室の入口には大変立派な岩崎弥太郎の座像があった（図 11）。勿論、立入自由である。



図 11. 岩崎弥太郎の座像

ウィキペディアによれば、「岩崎弥太郎（いわさき やたろう、1835. 1. 9-1885. 2. 7）は、日本の実業家。三菱財閥の創業者で初代総帥。明治の動乱期に政商として巨利を得た最も有名な人物である」そうである。弥太郎は、明治 18 年（1885 年）に満 50 歳で病死したが、それまでに政商として三菱財閥の基礎を築いたようである。弥太郎の事業の詳細は、ウィキペディアに詳しく記載されているので、参照して下さい。

本像横の説明書には、「本像は、岩崎弥太郎没後、岩崎家の依頼により、1890 年代に大熊氏広が制作した」と書かれている。なお、[13\) のサイト/m](#)には、大熊氏広の経歴が次のように書かれている。

大熊氏広（1856 年～1934 年）は埼玉県鳩ヶ谷市出身。明治 9 年、日本の本格的美術学校である工部美術学校が創立されたに「彫刻科」に入学し、一期生を主席で卒業。その後、「有栖川邸」の彫刻を担当する。腕を買われ、「大村益次郎像」制作の依頼を受ける。更なる技術向上の為、留学を決意、三菱財閥 2 代目：岩崎弥之助の援助を受けヨーロッパに留学します。この日本初の西洋式銅像の成功により、その名声は不動のモノとなる。彫刻の多くは当事者の依頼によるもので、モデルは皇族・政治家・軍人・実業家・学者と幅広く、当時の日本を代表する彫刻家として重きを成していた。現存する主な作品・・・大村益次郎、有栖川宮熾仁親王、小松宮彰仁親王、八甲田山雪中行軍記念像（後藤伍長）、伊能忠敬、福沢諭吉など

### (5) 湯島天神

三菱史料館の近くには、湯島天神がある（図 10 上の地図を参照）。ここの梅が咲き始めているので、ついでに寄ってみた。図 12 には、梅の咲き具合を示す。熱海梅園と違って、ここの梅は未だ三分咲き程度であった。今回は、これから別の銅像も探索する予定であった。しかし、老兵の私はここまでに歩き過ぎたので、足がつってしまい、今回の探索はここで中止とした。



図 12. 湯島天神の梅（2019年3月13日現在）

## 参考資料

- 1) のサイト : <http://www.geocities.jp/douzouz/>
- 2) のサイト : <http://www.geocities.jp/bane2161/wadasei.html>
- 3) のサイト : <https://www.nhk.or.jp/museum/access.html>
- 4) のサイト : <https://www.asoview.com/note/638/>
- 5) のサイト : <http://hizou.30maps.com/map/217582>
- 6) のサイト : <http://www.esashi.com/kikuta.html>
- 7) のサイト : <http://www.asahi.com/photonews/gallery/121114mori/mori11.html>
- 8) のサイト : <https://spice.eplus.jp/articles/18319>
- 9) のサイト : <https://www.artandlive.net/topics/enjoy-the-theater>
- 10) のサイト : [https://www.toho.co.jp/stage/theatre\\_crea/access.html](https://www.toho.co.jp/stage/theatre_crea/access.html)
- 11) のサイト :  
<http://hizou.30maps.com/tag/%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%81%AF%E3%83%86%E3%83%AC%E3%83%93?p=11>
- 12) のサイト ; <https://www.mapion.co.jp/phonebook/M04005/13105/21331746007/>
- 13) のサイト : <http://www.geocities.co.jp/douzouz/ookuma/ookumatop.htm>